



召命の現状と 今後の課題

日本カトリック神学院
院長 牧山 強美

「あかしすることが召命を呼び起こす」。今年、司祭年の世界召命祈願日(4月25日)に教皇が私たちにに向けて黙想するように提案したテーマである。教皇は、司祭・修道者の召命に特徴的な3つの側面、つまり「キリストとの親しさ」、「完全な自己奉獻」、「交わりの生活」を簡潔に解説し、司祭・修道者がこれらを喜びをもって忠実に生きている模範を示すことが重要であり、そういう司祭・修道者との出会いによって若者の召命が呼び覚まされると強調している。司祭・修道者の召命減少が叫ばれている地域では、「あかし」が不十分であるとの叱責の言葉とも受けとれる。日本全体および長崎教区が、今後の司祭・修道者の召命に関して不

安を抱いているとすれば、教皇は、その「解決策」を真正面から、しかも適格に提示している。司祭年を終えようとしている今、また今後も召命において模索すべきは、司祭たちの回心であり、またそれを支え共に働く信徒たちの理解と祈りである。

しかしながら、司祭・修道者の召命が増加している地域にあつては、召命が減少している地域よりも、司祭や修道者の「あかし」がよりよく行われているかというように感じていない。司祭や神学生の数、修道者や志願者の数の多い少ないは、「あかし」やその召命の正真性、召命が正しい動機であるかどうかの「ふるい」にいつかはか

けられなければならない。数(量)と質という視点から補足すると、司祭・修道者は数も必要だが、むしろ質をこそ大切にすべきである。ある程度の数(量)がなければ質も低下する現象はあるが、質を抑えてまで数に走ると、信頼と力を失い、結果的には数も失うことになる。司祭・修道者の召命の問題は、その地域の社会政治体制、経済的要因、民族性なども広く関係している。

ところで、「召命」という語は、すぐに司祭や修道者の召命を連想させる。それは、私たちが司祭・修道者の召命の不足を痛感し、そのために祈っていることであかしでもある。日本のほとんどの教区や修道会は、司祭・修道者不足の問題を認識しており、将来の組織の担い手不足を実感している。漠然とではあつても誰もが、教会が全体としてその活力を失いつつあると感じている。召命促進のための活動や練成会が企画・実施され、熱心に祈りがささげられている。

しかし、「召命」とは、司祭・修道者だけの恵みではない。すべての命が神から来て、神に向かっている。司祭・修道者としての生き方以外の自分の生き方を天職、召命だと認識している人も少なくない。結婚も召命である。夫と妻、親や子供として神から召された命を、

神から来て神へ向けられたものとして受けとり、それを丁寧な生きることが求められている。先述した教皇の指摘する召命の3つの根本的要素は、司祭・修道者だけでなく、すべての人に向けられている神の呼びかけである。司祭・修道者の召命の問題を、他の多くの方々の召命と関係づけることが急務であると感じる。

したがって、司祭・修道者の召命だけを増やそうとしても、限界がある。子供の信仰教育、青少年司牧、結婚の準備教育、夫婦や家族の司牧など、教区・小教区の活動全体が共同体として神の呼びかけに応える気運を促進する必要がある。ある司祭が粋のいい青年を一本釣りするという視点も必要であるが、皆でバランスよく網を引く、神の国を継承する救いの網でひとり目の模範的なあかしは貴重であるが、弱い人間にとってはそうはうまくいかない。ひとりの人は罪人で弱くとも、共同体としてのゆるし合いや助け合いは、立派な福音的あかしであるし、その方が現実的であると感ずる。弱い兄弟姉妹を、共に生きる自分の兄弟姉妹として受け入れる感覚を育てることは、家庭から小教区、司祭団から修道院に至るまで必要不可欠である。今の時代は、教会におい

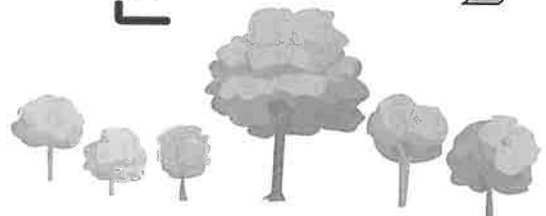
ても社会においても、完璧な英雄を求めていると感じることもあるが、自分の限界や弱さをいやおうなしに認識させられる現代にあつては、弱くとも神の招きに応えてよいのであつて、ひとりではなく共同体として神の民を構成していくという視点も重要である。

いずれにせよ、召命は神の呼びかけ、神からの恵みである。日本や長崎の教会がすでに神の恵みを失いかけているとは思わない。厳密に言えば「召命」は減少しないのである。神は常にすべての人に呼びかけている。私の命は、私のためだけのものではなく、隣人のための命でもあるという信仰と愛を呼び覚ますところから再スタートしたい。教会の命も同様である。教会が教会組織の維持や教会内での活力のみを追い求める時に、教会はその存在意義を失っていく。社会に奉仕する教会、教会が社会の必要に応えているかを問う必要がある。



Q & A

「召し出し」



Q・唐突な質問で恐縮ですが、わたしたち人間は一体何に召され、何をしようかにこの世に呼び出されたのでしょうか。

A・これはまた、いきなりとてつもなく巨大な質問をいただきました。

唐突な質問には唐突な答えをというわけではありませんが、ご質問そのものに、すでにかんがりの答えが含まれているように思います。

どうでしょうか。自分の一生を顧みて、自分は何のためにこの世に呼び出されたのか、などと少しもしらけることなく問いかける人は、そんなに多くはないのではないのでしょうか。

普通は、ある日ある時自分の意志とは無関係にこの世に生れ、いくらかの

時を過ごして、この世界から消えていく、ごく平凡な一生を描くのではないのでしょうか。

「何に召され何をするためにこの世に呼び出されたのか」。こんな視点で自分の生涯を見つめなおすことができたら、もしかしたら、全く違った人生観が生まれてくるかもしれません。

何に召され呼び出されたのか。これこそ唐突な答えですが、神事としての相撲が教えている、と指摘する人がいます。

相撲はまず、「東」「西」への呼び出しからはじまります。しかも、その呼びかけるのはシコ名といわれる名、いわゆる相撲名です。

そして、召し出され、呼び出された者は、円い土俵の上という世界の表面で、力を尽くして取っ組み合いをするのです。

そしてその取っ組み合いは横綱、すなわち神のしるしを帯びた者とのそれへと、高められていくのです。

唐突さを乗り越えて、まじめに考えてみれば、わたしたち人間のこの世界への呼び出し召し出しを、象徴していると言えなくもありません。

ただシコ名ではなく、神のいのちの名つまり霊名による呼び出しではあります。……。

Q・「召し出し」ということばは、普通司祭や修道者への召し出しという意味で使わ

れますので、人間のこの世界への召し出しとは、関係ないのではないのでしょうか。

A・ そうとも言えないのではないのでしょうか。司祭や修道者への召し出しとはことば尻をとらえるようで恐縮ですが、単に司祭になればよい、修道者になったのでそれで召し出しは完成したとは言えないからです。

司祭として修道者として、どんな役目に召し出されたのか。このことこそ召し出しの根本というべきことだと思います。

まさに第一のご質問、すなわち、わたしたち人間は、神さまからこの世界に呼び出され、誰も代理できないそれぞれに使命を帯びていることを、力強く指し示す役目こそ、司祭修道者が、何をさしおいてもなさねばならないことだからです。

そういう視点を持つことができれば、日常の利害関係その他のしがらみに押しつぶされて、神さまの呼び出しが聞こえなくなる日々を、常に覚醒させてくれる者の存在が、いかに大切であるか、身にしみて感じるができるようになるでしょう。

すると、おのずと別枠の召し出された者の、存在の重要性を感じるようになるのではないのでしょうか。

Q・ 単刀直入にお聞きします。司祭や修道者は多い方がよいのでしょうか。それ

ともそんな多くいる必要はないのでしょうか。

A・ 普通この種の質問に対する答えは、現状を顧みて、多い方がよいに決まっている、ということになるのでしょうか。

だからこそ、召命促進委員会などの組織も出来て、担当者の熱烈なご指導のもと、その運動をつづけているわけです。

しかし、別のうがった見方をすれば、その数は、教会の成熟度による、と言える部分もあります。

つまり教会全体のレベルが上がって必ずしもすべての面で、司祭や修道者のリード（指導）やサポート（支え）を必要としないというほどになっていけば、その数はそんなに問題にならないということになるでしょう。

そういう見方をしていくと、現代の社会は相当に成熟してきており、聖職者を必要としない分野も、かなり現れてきています。たとえば財政面とか、行事対応面とか、複雑にからみあうしがらみの中で、交渉力を必要とする分野とかです。

どうしても必要とされるのは、福音宣言力とか、しがらみにとらわれないコーディネート（役割分担をしつつ一つにまとめる生命体づくり）力です。

秘跡を力として指し示し、その力に支えられた、福音力推進者としての役割です。

そういう意味で言えば、チームワーク

のできる能力こそ、召命を考える上で何よりも優先させるべき項目、ということになるでしょう。

Q・ 世界は人口爆発という大変な危機を迎えている中で、日本は逆に少子高齢化が、加速度をつけて進行中です。そんな状況の中で、召命も先細りになることは目に見えています。どうしたらよいのでしょうか。

A・ 言われるような危機的状況の中で、あの手、この手、口先、小手先、それに根本策も含めて、いろいろな策が現れ出てきています。

具体的には、子供を集めた召命大会とか、先輩司祭による勧誘とか、大人への呼びかけなどなどです。

根本的なものとしては、現代っ子の晩熟の問題、小神学校システムの問題、終身助祭制度の検討などです。

ただ、どれもこれが決め手と言えるものはありません。

ここで最も大事なことは、これらの小手先、根本策合わせて、召命問題という教会の根幹に関わる問題を、みんなで共有し、進化および深化させていくことだと思います。

二〇一五年に開かれるという教区シノドス（代表者会議）のメインテーマにしてもよいのではないのでしょうか。

新しい要理

「共に歩む旅」(24)

第二十二課

「堅信の秘跡」
成熟した信仰

「進行係」(参加者を歓迎して、十字架の印をしながら集いを始める)

「二人か三人の方が祈りで神さまをこの席に招いてくださいませんか。」

(誰でも自由な祈りを捧げる)

A. 私たちの生活

「進行係」

「どなたか次の話を読んでくださいませんか。」

日雇いをしながら一人で生活してきた70歳台のおばあさんが、生涯苦しい生活の中で集めた時価5千万円相当の財産を、大学の奨学金に寄付したことで話題に

なっている。おばあさんは、行商と日雇いで生計を維持しながら、節約して大事に貯えた自分の全財産である畑六十六坪、水田四百八十坪、住宅二十七坪など、時価が5千万円に達する財産を、家庭事情のむずかしい学生と優秀な人材養成に使用して欲しいと大学に寄付した。

貧乏であったために勉強出来なかつたことが、生涯無念だったおばあさんは、「平素まじめい隣人に関心を持っていたおりに、生前もう少しやり甲斐がある仕事をしなかつた」と、「家庭の事情のために勉強出来ない学生たちと地域の優秀な人材のため、少しでも役に立つよう」と思

い、寄付することにした」と言った。

(2001年4月2日付新聞記事)

「進行係」(参加者たちに質問する)

①このおばあさんが持っていた無念さは何でしたか。

②困難な状況にありながら、他の人のために献身的に生活する人を知っていますか。お互いに話を交わしてみましよう。(一組対話を交わしてから全体の集いで発表する。)

B. 神のことば

堅信の秘跡は、洗礼の秘跡を受けた信者の信仰を、堅固にしてもっと成熟した信仰者(キリスト者)となるように、聖霊の恵みを授ける儀式です。この秘跡を通して、私たちはキリストと教会にもっと一致し、教会に積極的に参加し交わっています。私たちは、成熟した信仰者として力を尽くして、救いと希望の福音をことばと行いで伝えます。

「進行係」

「どなたかローマ書 8・14、17(霊に従って生きる人生)を読んで下さいませんか。」

・ ・ ・ 聖書を読む ・ ・ ・

「他の方がもう一度読んでくださいませんか。」

・ ・ ・ 聖書を読む ・ ・ ・

「次の聖書の言葉を一人ずつ順番に祈るように読んでくださいませんか。」

「神の霊によって

導かれる者は皆」(3回)

「アッバ、父よ」(3回)

「神の子供」(3回)

「進行係」(参加者たちに質問する)

①聖霊は私たちをどう変化させますか。

②私たちがキリストの望み(思い)に参加し交わろうとするなら、何が要求されますか。

聖霊は、それぞれの人に多様な恵みの賜物をくださいます。キリスト者は、各自の受けた恵みの賜物を、共同の利益のために使い、「キリストの栄光」(フイリッポ 1・20)を証しする使命を受けた人々です。

賜物にはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ聖霊

です。務めにはいろいろあります
が、それをお与えになるのは同じ
主です。働きにはいろいろあり
ますが、すべての場合にすべての
ことをなさるのは同じ神です。一
人一人に「聖霊」の働きが現れる
のは、全体の益となるためです。
(Iコリント12・4・7)



②他の人をよく評価できていま
すか。

【参考聖書】

- *マタイ 16・24、27
- イエスに従う道
- *ヨハネ 7・37、39
- 生きた水の流れ
- *ヨハネ 14・15、17
- 聖霊を与える約束
- *使徒言行録 1・5、8
- 約束の聖霊
- *イザヤ 11・1、9
- 平和の王

C. さらに一歩進んで
旅をつづけよう

堅信の秘跡を通して、私たち
は父なる神との関係がもっと深
まり、キリストともっと強く一
致するようになります。同時に
ほかの人との関わりも深まるよ
うに、聖霊が力強い信仰と勇氣、
神の子として生きていく深い知
恵と洞察力を与えて、私たちに
まかれたその信仰の種が実を結
ぶように導かれます。

このように特別な恵みを受け
る信者たちは、教会に奉仕し、
この世にキリストを伝える使命
を受けます。

①あなたは自分を正しく評価して
きていますか。

【進行係】(参加者たちに質問する)
①自分の信仰を成熟させるため
に、できる仕事を探してみ
て、その中から一つを實踐してみ
ましょう。(例えば祈りの集
い、黙想、聖書朗読、奉仕活
動など)

②キリストの愛を隣人に伝える
ことができる仕事を探してみ
て、その中から一つを實踐し
てみましょう。

【進行係】

自由なお祈りを奉げながら、
集いを終わります。

【進行係の心得】

*神の前に大人になるとはどう
いうことかを学ぶ。
自分のみならず、他の人を正
しく評価することができるこ
と。そして、それぞれの能力
を生かしながら共同体をつく
ることができること。これが、
成熟した信仰の証である。

【覚えましょう】

74. なぜ堅信の秘跡を受けなけ
ればなりませんか。
* 洗礼を受けた信者が、聖霊の
特別な恩恵を受けて、もつと

堅固な信仰者として靈的に生
まれ変わった人になるため
です。

75. 聖霊の七つの賜物とは何
ですか。

* 堅信の秘跡を通して、信者た
ちは聖霊の恵みを受けますが、
これを聖霊の七つの賜物とい
います。

聖霊によってわたしたちは、
ますます信仰を強め、キリス
ト者として力強く立ち立
ちます。聖霊の七つの恵みは次の
とおりです。

- ① 上知
- ② 聡明
- ③ 賢慮
- ④ 勇氣
- ⑤ 知識
- ⑥ 考愛
- ⑦ 畏敬

76. 教会のおきてとは何ですか。
* 教会のおきては、教会の頭が
主キリストから与えられた権
能を持って、信者の恩恵の生
命を守り、その救いを安全に
するために定めたものです。



金祝

司祭叙階50周年を
迎えた司祭からの
メッセージ

司祭叙階五十周年の金祝を迎えることになった。

これは慈悲深い神様の大きなお恵みと、司祭・シスター・信者の皆さんのお祈りご支援の賜物だと心から感謝し、お礼申し上げます。



第五の喜びのシヨックを 待望して生きていく男

長崎教区司祭

山内 豊

ただ一人の司祭の記憶に残っているメモ、心に焼き付いている記録を書きます。

一九六十年三月十九日、聖母マリアの聖年聖ヨゼフの祝日に、召し出しの促進と云う意図で、山口大司教様から田平教会で司祭に叙階される。光陰矢の如しとか、時の流れは早いもので、ハアハア、フウフウ云いながら、信者の司牧をしているうちに喜寿をむかえ、

一九四五年終戦の翌年と云うより、原爆投下の翌と云う方が理解しやすいと思いますが、終戦第一号として、大浦の小神学校に入学することになり、入学試験のため長崎に行くことになった。南田平から外に出たこともなかった田

舎者が、汽車に乗り、浦上駅に停車した時、原爆投下数ヶ月の、生の悲惨極まる光景を見て、大シヨックを受けたことは、今も心に焼き付いている。家の残骸には焼け焦げて赤くなつた瓦礫が散乱し、周囲の山は焼け残りの枯れ木が白くなつて左右に倒れ、滑石の方まで一望され、とにかく筆舌では表現できない惨状を見た。大浦の小神学校に着くと、所々壁は落ちくずれ、大浦天主堂のステンドグラスは爆風で吹き飛ばされ、残る窓枠には応急手当てで、青いキャンパスが張られ、小神学校の上のグラウンド脇の防空壕の横には、爆死した神学生の墓まで見て、原爆のもすごい威力恐ろしさを、戦争の恐ろしさを腹の神髓まで実感し、第二の大シヨックを受けた。



叙階の喜びを
両親と共に



田平教会で叙階された私は、大浦の司祭館でしばらく館詰

めにされ、伊王島や黒崎教会、近くの修道院に、ピンチヒッターとして、ミサを捧げに行く。

大浦教会から三浦町、中町、玉之浦教会に転任。

初めて主任司祭に任命され、五島の玉之浦教会に転任した時のこと。生まれて初めて行く五島、どんな所だろうかと思味津々、心はずませる。中町教会の主任司祭に、「転任辞令が来ました」と報告すると、「おれも五島では魚釣りをしとつた。」と、一言だけの送別の辞？をいただいた。長崎港から船に乗り、約六時間余りで福江港に着き、お告げのマリア修道院で一泊。翌朝バスで福江から中須まで二時間余り、中須から井持浦まで渡海船で40分、その日は小雨が降っていたが、海はなぎだつた。船は行けども行けども人家は見えず、ふと島流しと云う言葉が頭を過ぎり心細くなった。やつと玉之浦の町並みが見え始めほっと一息つくくと、海の方岐点とでも云うところか、船の舳先が井持浦の方にむき始めると、か細い汽笛が鳴り

教会の鐘も聞こえて来たので、や
つと着いたかと一安心する。(当時
玉之浦の信者数は約千人) 波止場
に着くと、信者がそこから教会ま
で二列に並び、大歓迎を受けびつ
くり仰天。俺も司祭だなど改めて
実感し、頑張るぞと気持ち新たに
した。これは喜びの第二のショ
ックです。

(井持浦では問題になっている、
カネミ油のてんぷらドーナツ等を
食う)

玉之浦から鯛之浦教会に転任

(信徒会館新築) 誕生日に、バイ
クの事故で記憶喪失を体験する。
入院中に先輩神父様が見舞いに来
られ、「あの神父はもう、まともに
ならんだろう」と、司教に報告し
たとのこと。本人はいつもの通り
話していたようですが・・・
見舞いに来た人も、話の内容も全
然知らない。実際報告通りで、今
もまともでない。これは第三番目
のショックで、人間の弱さを改め
て知る機会となった。

鯛之浦から相浦教会に転任

(信徒会館新築、大崎教会の増築、
信徒会館の新築)

黒崎教会に転任

(教会大修理、石垣や信徒会館の
新築に経費二億円) 工事完成祝と
出身新司祭の祝賀会が終わると、

「はいそれまでよ」と、上神崎教
会へ行けとの辞令。(石垣、信徒会
館改築) 上神崎から行く崎がなくな
ったのか? 教会でミサを捧げは
じめ、「天のいと高き所には神に栄
光」と、本人は上手く歌ったかな
と思っていたが、気が付いたとき
は救急車の中。崎から海へドボー
ン。この第四のダウンのショック
は大きく、これに加えて陰退の辞
令までいただくことになった。こ
こで健康のありがたさを、身にし
みて実感することになった。

五十年を振り返って見ると、教
会の浦廻りをし、破れの修繕や信
徒会館を造って廻ったような気が
している。現在上神崎の教会から、
田平の生家に隠退し、長期に渡り
積み溜まった心身のストレス解消
をしている。

人間は年をとると目はかすみ、
耳も遠くなり、足ももつれ、頭も
錆付き、「よいしょ、こいしょ、ど
っこいしょ」と気合を入れながら、
大根やキュウリ、トマトなど作り、
花壇造りなどしながら、毎日を送
っている。時折平戸地区の教会か
ら呼ばれ、ミサや葬儀のピンチヒ
ッターに行きながら、天国での大
きな喜びの第五のショックを待ち
ながら、終点に近い旅路を歩ん
でいる。



略歴

- 1932年6月8日平戸市
生まれ田平教会出身
- 1960年3月19日司祭叙階
同年3月・大浦司教館
同年9月三浦町教会助任
- 1962年・中町教会助任
- 1963年・玉之浦教会主任
- 1969年・鯛之浦教会主任
- 1975年・相浦教会主任
- 1988年・黒崎教会主任
- 1995年・上神崎教会主任
- 2002年・引退後、田平へ



大司教談話室

⑭

召命のための

取り組み



Q・少子高齢化社会になり、子どもが少なくなっています。神学生も少なくなっていると聞きます。将来の教会のことが心配です。どんな対策を考えておられるのですか。

A・1、現状を知る

教区の統計によれば、近年の少子高齢化も神学生・志願者の数の激減も認めざるを得ない事実です。

	1989年	2009年
信徒総数	72,329	63,507
小神学生	82	19
大神学生	36	13
修道女	1,068	867

このような劇的な状況に対して、教区レベルでは、「召命促進委員会」以外に、具体策が練られています。4年後に予定されている教区シノドスにおいて、最重要課題の一つとなるはずで、同時に、少子高齢化を単に手をこまねいて見過ごすだけではなく、皆で、どうすればその問題を解決できるか

ということを政治や経済、生活感覚などの面から考えるべきだと思います。

2、折る

わたしたちの教区では、多くの小教区で絶えず「召命のための祈り」がささげられています。祈りは召命を生み育てる上で大きな力になります。多分、祈るときに、身近な神学生や修道会志願者たちの名前を挙げる、あるいは自分たちの小教区から神学生が出るようにといった具体的な意向を述べるなどの工夫をするのもつと意識が高まるでしょう。

3、召命促進委員会

2001年4月をもって教区の新しい体制で11委員会が活動を開始しましたが、その一つに「召命委員会」がありました。『新しい千年期の福音宣教をめざして―教区本部事務局 活動方針―』（12頁）によればその活動方針は大変意欲的なものでした。しかし、その後11委員会は見直され、分野ごとに三つの部にまとめられて、昨年4月から活動を始めました。その三つの部は、「信仰養成部」（預言職）、「福音化推進部」（王職）、「教会奉仕者等養成部」（祭司職）です。それまでの召命委員会は、「教会奉仕者等養成部」を構成する委員会の一つとなり、名称も「召命促進委員会」と改められました。そして、この4月に発表された活動計画として次のことが掲げられています。

(1) 召命促進は現代教会の最重要課題であること
を確認し、役割としての司祭職の召命を目指して、教会、家庭、神学校と一致協力して、活動する。

(2) 現代の少子化社会、信仰への無関心社会にお

いて、長崎教区も司祭・修道者数の激減が憂慮されている。青年や大人の召命の可能性と問題点をさぐり、今後の検討課題とする。又終身助祭の召命に光を当てる。

(3) 召命は恵みであり、家庭の祈りや理解、家族の支えが必要不可欠である。講演やミサを通じて召命の意識を高め、教会をあげて支援体制を整える。

(4) 活動 ① 召命促進運動と召命の集い。侍者とかかわり。② 青少年委員会、神学生養成委員会との連携と青年の発掘。③ 召命促進のための研修会、講演会、ミサ、祈りの集いなどを行う。なお、「教会奉仕者等養成部」としても、召命の課題と取り組みつつあります。

4、教会共同体全員による福音の証し

子どもたちは、教育と環境の影響を受けながら育って行きます。その場合は、まず家庭、そして学校と地域社会、教会共同体などです。従って、司祭だけではなく、修道者も信徒も、生き方によって子どもたちに影響を与えていることを自覚する必要があります。キリスト信者としては、家庭や地域社会や教会共同体の日常生活の中で、福音に従って神を信じ、人を信頼すること、神を愛し、ほかの人を自分と同じように愛するように努め、そのすばらしさと喜びをことごとく行いによって証しするようになりたいものです。特に、司祭は、羊のために自分のいのちを与える羊飼いで、信者である無しにかかわらず相手を尊敬し心を開いてやさしく接する奉仕者の生き方をするのが大切だと思います。召命のためには、これこそが、祈りと共に何よりも重要だと思います。

(高見 三明)

'Full of Grace'

一ダヴァオでのホームステイ



札幌教区
カトリック新田教会
林 朋子

昨年10月20-28日、フィリピンのダヴァオで、第五回アシパ総会に参加させて頂いた時のことです。参加者230余名のうち、アジア各国からの参加が200名以上、他にヨーロッパ3国からも信徒が出席。司教、司祭、修道者と信徒が共に祈り聖書の分かち合いをなしミサに与りました。福音の力が小共同体の人々をどのように動かし、教会全体を参加型教会へと変革させつつあることか。成功と失敗の例をあげながらも、各国の参加者が熱意に燃えて語ってくれた実践談はきわめて印象深いものでした。

この国際会議の半ばに一泊のホームステイがあり、参加者は10人単位でダヴァオ市内の各地域の教会へ出向き、そちらの信徒宅に泊まりました。私が行った聖ヨゼフ教会は、小共同体活動の盛んな小教区の一つで、二万人の信徒を抱え46の巡回教会があり、2人の司祭が司牧に当っておりました。昼食を挟んで午前午後と開催されていた第一回全小教区小共同体会議を見学し、信徒リーダー間の活発な意見交換に驚きました。

ホームステイ先の真向かいにある巡回教会では、毎週土曜日の夜に集会がもたれるとのことで、花が飾られ聖画の美しい小聖堂の聖櫃な雰囲気は、地域の信徒達がいかにこの小聖堂を大切に守っているかの証しでした。満席になるほど信徒が集り、信徒共同体の熱意が伝わってまいりました。この夜も何人かが聖書を読み、その後いくつかのグループに分かれて心に響くみ言葉を選び、分かち合いをして、「共同体の交わり」を確かに実感してきました。

このホームステイで私は、極めて暗示的な経験をしました。それは天使祝詞の一語、「Full of Grace」という言葉が、何度も警鐘のように聞えてきたのでした。私のホストファミリーは母子家庭で、3人の子供がおり、更に人相の悪い2人の年齢不詳の男性が家の前で私を睨みつけていました。家はみた

ところ崩れ落ちそうなほど古く、玄関の網戸は破れたままであり、家の中に入るのが怖いくらいで、内心顔がどこか引きつってくるのを覚えながら、ホストの手前微笑んでおりました。半地下3畳間程の子供部屋の網戸も破れていたもので、蚊に刺されないようにガラス度を閉じると一瞬蒸し暑くなるのですが、コンクリートの壁に寄りかかると、ひんやりとして扇風機なしでも涼を取ることができました。シャワー室は、木の扉がすでに腐って下部は落ちており、茶色に錆び付いた巨大なドラム缶の蓋が半分だけ開けられ、たっぷりの水が入っておりました。ペットボトルで作った柄杓があるだけで戸惑いましたが、よく見ると壁に洗面器が吊るしてあったので、これを借りて水を入れ素早く身体を拭きました。いつも持ち歩く固形石鹸が大変役立ちました。

小聖堂から戻ると教師をしている妹さんが仕事を終えて帰ってきて、いろいろ話しが弾み、この妹さんが働いて、家にいる兄弟と母子家庭の姉を養っていることが分ってきました。朝食の食卓で末の男の子が食事をとらず泣きじゃくる様子から、母親と長男と私だけが朝食を許されたことを理解しました。成長ざかりの子供なのに、三食ままならずとは心が痛みました。大きな犠牲を払って私を招いて下さったことへの感謝の気持ちを込めて、手紙と共に幾ばくかのお金を置いてきました。後で聞いた話では、これは二ヶ月分の食費に当るとのこと、救われた気がしました。

信仰の篤い母親は、家にいる間は絶えず聖歌を歌い続け主を讃美しておりました。居間の壁一面は大小様々な聖画で覆い尽くされ、静かな宗教的雰囲気が印象に残りました。巡回教会でも母娘共に良い奉仕をしているとのことでした。「Full of Grace」、この言葉の真意を求めて、私はこれからも魂の旅を続けることになりそうです。

列福一周年記念

長崎巡礼月間

巡礼ウォーク・城山コース



やがて取り締まる側からは「妖術使いの伴天連」と噂されるようになった。江戸にまで出没する神父の宣教活動範囲は幅広く、今回は終焉の地としての長崎の町を訪ねた。

城山教会…アウグスチノ会より戦後3人の司祭が来崎し、学校教育の足掛かりとして1954年に城山教会を建立し、浦上小教区より分離独立した。慰めの聖母に捧げられた教会で、2008年11月、列福式が行われた時、前夜祭(祈りの集い)の会場となった。

金鑄谷…トマス神父は、脇差をさした武士の格好で各地を移動し、神出鬼没の魔法を使う神父として、きびしい取り締まりの網をかいくぐっていた。金鑄谷は、神父が潜伏した場所として伝承がある地である。

万才町・ミゼリコルディア本部跡(旧本博多町)…日本に潜伏したトマス神父が馬丁に雇われた奉行所は、立山に移る以前の本博多町にあったと思われる(トマス神父が馬丁となって訪れた牢内に入牢していた前上長グティエレス神父は1632年に殉教している)。

本博多町にあったミゼリコルディアの組は、禁教令下でも医療や貧者の救済が1620年までは黙認されていた。そのリーダーのミカエル薬屋は1633年に殉教し、188福者の一人となった。

サン・アウグスチノ教会跡…中島川常磐橋のたもと

サン・アウグスチノ教会は、アウグスチノ会の日本での3人目の上長となったエルナンド・

デ・サンホセ・アヤラ神父が1612年ごろに建てた。1617年、神父は、棄教した藩主喜前を諭すために大村城下で公然と説教を行って殉教した205福者の一人である。トマス神父は、グティエレス神父について上長に任命された。

西坂殉教地…トマス神父は1637年、片渕で捕縛され、桜町牢に入れられ、2度穴つりの刑を受けて殉教した。37歳であった。現在26聖人記念館の中庭にトマス神父の像がある。

司祭トマス金鑄次兵衛

アウグスチノ会司祭
今田昌樹

長崎や外海、大村などで伝説的な人物としての地位が揺るぎないものとなっている金鑄次兵衛こと、聖アウグスチノ修道会会員、聖アウグスチノのトマス次兵衛神父「修道名を Tomás de San Agustín (17世紀には Thomas de San Augustin と表記したようである)」の生涯を正確にたどるのは思いの外困難なことだと言える。修道会内外に資料が残ってはいるものの、生涯の軌跡を跡づけるためにはとても十分なものは言えない。しかし、限られた資料の中から浮かび上がってくるのは、数々の言い伝えが生まれたのをうなずかせる魅力的な一人の司祭であり修道者、一人の人間の姿である。

城山巡礼コースは参加者41人、スタッフ10人が城山教会に集合して始まった。講師にアウグスチノ会今田昌樹師を迎え、金鑄次兵衛神父の足跡をたどった。今回は巡礼地を2時間以内で徒歩できないコースだったので、マイクロバス2台を利用しての巡礼となった。

巡礼のテーマ…「伝説の人、トマス金鑄次兵衛神父」

1614年の幕府による禁教令で、宣教師も神学生も国外追放され、12歳のトマスはマカロのイエズス会セミナリオで司祭を目指した。しかし、諸問題を抱えた神学校は閉鎖となり、神学生たちは日本に送り返された。それでも夢を諦められなかったトマスは日本で潜伏していたアウグスチノ会の司祭に会い、司祭への道を新たに志すためにフィリピンへ渡り、ついに1628年司祭に叙階された。迫害に苦しみあえぐ日本の同胞のために総長に懇願し、1632年日本での潜伏活動が始まった。ある時は奉行所の馬丁となり、ある時は侍に変装するなど彼の巧みな宣教師腕は多くの信者を慰め、励ました。

次兵衛神父の揺るぎない信仰を育てた苗床は、

貧しくも高貴な家庭生活であった。1563年に大村純忠が大名として初めて洗礼を受けた日本におけるキリスト教揺籃の地大村に生を受け、洗礼を受けてトマス次兵衛と名付けられたのは1602年。その年、純忠の長男喜前が棄教し領内のキリシタン弾圧に乗り出したものの、隣国有馬では有馬晴信が手厚く教会を保護し、そのためセミナリオが発展充実することができたのは6才でセミナリオに入學した次兵衛にとつて非常に大きな意味があった。彼は迫害の嵐が迫る困難な時代にあつて、当時可能な限りの最高の教育を受けることができたのである。迫害の波を避けながら有馬領内を転々としたセミナリオが長崎に移り、1614年の伴天連追放令以降閉鎖を余儀なくされた後、マカオに流された次兵衛はかの地で勉強を続けることになった。しかし、いきなり50名あまりの神学生（同宿）他総勢80名ほどが受入態勢も整っていないコレジオに送られてきたのだから、十分な環境の中で勉強を続けられるはずもなく、1620年には日本人のためのセミナリオは閉鎖され、次兵衛を含むほとんどの者が日本に戻されている。帰国後すぐに伝道士、説教師として働き始め、その歩みを通して福音のために命を賭ける宣教師たちの生活を自ら体験することになった次兵衛は、役人の手を逃れながら信徒のために働く中で、迫害下にある信徒にとつてご聖体やゆるしの秘跡がどれほど大きな力を持っているかを肌で体験した。加えて、彼はこの頃聖アウグスチノ修道会宣教師グティエレス神父に出会い心を動かされている。秘跡の力の体験とグティエレス神父との出会いを通して、次兵衛はマニラに渡り、アウグスチノ会の門をたたくことを決

意したのである。

1622年20歳でマニラに渡った彼を数々の困難が待ち受けていた。日本人を司祭志願者として受け入れたことのなかった当時のマニラのアウグスチノ会修道院は彼の受け入れに難色を示したのである。しかし、まもなく管区長となったメントリーダ神父はこの若者のうちに召命の光を見て取った。渡航の翌年めでたく入会を許可された次兵衛は、1623年11月誓願を宣立した後、セブ島で勉強を続け、その地で1627年あるいは28年司祭に叙階されている。サント・ニーニョへの信心が篤かったと言われるが、それはこの時培われたものだ。叙階後、三年あまりの歳月をフィリピンで過ごしたトマス次兵衛神父だが、迫害の嵐が吹き荒れる祖国同胞への思いは何物にも変えがたく、上長たちにはフィリピンに留まって司祭職をまっとうすることを勧められながらも、総長に手紙を送り、ローマ訪問と合わせて日本に戻れるように直訴したことはよく知られるところである。現実には、この手紙が総長の手に届く前、1631年の末までに手紙の主は再び祖国の土を踏むことに成功した。

彼が帰国を果たした1630年代の長崎だが、それはまさに地獄のような様相を呈していた。司祭は殆ど残っておらず、奉行所が目を光らせる中、一日でも長く生き延びて、キリストとその教会のために身をささげたいという思いがこの司祭を突き動かしたのである。想像力を駆使してあらゆる状況に対応し、信徒のためには何をするのもいとわないうような柔軟性は彼の真骨頂である。帰国後、まずは、桜町の牢に囚われていたグティエレス神父と連絡を取り、彼を励ますために奉行所の馬丁になるという大胆極ま

りない行動に出たり、数々の変装を駆使して追っ手の目をくらませたりと、変幻自在の活躍は枚挙にいとまがない。

しかし、最も強調されるべきは、この司祭が信徒たちと魂の通う深い関わりができたことではないだろうか。17世紀アウグスチノ会の歴史家ホゼ・シカルド神父によれば、トマス次兵衛神父を匿ったり、何らかの援助の手を差し伸べたかどで殉教した信徒の数は637名に上るといふ。その多くはアウグスチノ会の第三会（在世アウグスチノ会）やアウグスチノ会の指導のもとにある「帯の会」と言われる信心会の会員たちであった。この数字がどこまで正確なのか今となつては確かめようもない。しかし、いづれにせよ、相当数の人が言うなれば彼のために命をささげたということはこのことの証に違いない。「心が心に語りかける」(Cor ad cor loquitur)」というニューマン枢機卿の言葉があるが、聖霊の交わりの中で行われる魂の通い合いこそ、教会共同体を生かし支える営みであろう。

注

① バルトロメ・グティエレス神父…会の資料に、次兵衛がグティエレス神父と出会ったとその名前まで記しているものは存在しないが、当時日本にいたと確認できるアウグスチノ会士はグティエレス神父を含めて二人だけで、もう一人ペドロ・デ・スニガ神父は囚われの身であったので、彼が出会ったのはグティエレス神父と断定して間違いないであろう。

② Santo Niño 〓 幼子イエス

生活教会 の中の教会



木鉢教会

フォトプラン 山本 富夫

百周年

長崎港に臨む木鉢浦の丘に
建つ教会堂。その白壁は信仰の
粋を醸すかのよう。

始まりは、一九〇一年、黒
崎から小瀬戸の赤瀬への移住
によるという。

一九一〇年、網場／脇に聖
堂を建立。時に二十戸足らず。
神の島の巡回となった。

一九三八年、木鉢浦の丘に
旧教会堂献堂。被爆により大破
するが、修復。六二年には、小
教区となり、六八年には増改築
を終えた。

一九八一年、信徒の増加と
老朽化に応え新堂建立。

ペトロに奉獻された教会堂
は今、陸路、海路を照らしその
航跡を見守っている。